

---

# ひぐらしのなく頃に改

桜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひぐらしのなく頃に改

### 【Zコード】

Z6568U

### 【作者名】

桜

### 【あらすじ】

この小説はリトルバスターズとひぐらしのなく頃にクロスオーバー小説です。残酷描写やグロい描写があるので苦手な人は気をつけて下さい。作者は感想と評価をくれると喜びます。後、この話はリトルバスターズとひぐらしのなく頃にゲームをプレイした事が前提になっているので未プレイの人は分り辛いかもしません。更新は一週間で二回か三回くらいできる様に頑張ります。

## 初めに（前書き）

初めに新小説の投稿が大きく遅れてしまいすいませんでした。

理由は今まで書き貯めた話が全部消えてしまったので一から書き直していました。

これからはそんな事が起ららない様に気をつけます。

## 初めに

最初にこの物語の設定を説明します。

この小説を主人公は棗鈴です。

この物語はバス転落事故の後の話です。

理樹と鈴は恭介達が作った世界で確かに強くなつたが、鈴の激しい人見知りだけは治らなかつた。

ゲームでは幼じみの男達の中で理樹に頼つていたが、この小説は理樹よりも真人に頼つています。

理樹達以外のリトルバスターズのメンバーと部活メンバーはあんまり出てきません。

リトルバスターズのメンバーに 笹瀬川佐々美と一木佳菜多は加わっていません。

## 初めに（後書き）

次の話から本編に入ります。

## プロローグ 夏期講習合宿

「…………あつこ……」

六月

電車に揺られながら赤い髪のストレートヘアードボニー・テイルの少女、棗鈴の口からそんな言葉が零れる。

「うん……最近、梅雨が近いから湿気が多いから一段と蒸し暑くなつたよね」

そう答えるのは鈴と小さい頃からの幼なじみで同じクラスメイトで幼なじみの直枝理樹だ。

「でもよ。何でこの時期に夏期講習の合宿があるんだよ。普通は夏休みとかにやるもんじゃないのか?」

「仕方がないだろ。毎年使っている合宿所が使えなくなつたから校長先生の昔からの友人からホテルを借りたのは良いが、相手の都合で六月頃にしか空いてなかつたんだからな」

バンダナを額に巻いた男、井ノ原真人の疑問に剣道着を着たツンツン頭の男、宮沢謙吾が答えた。この一人も鈴や理樹と同じで小さい

頃からの幼なじみだ。

「くう……明日から三週間、勉強漬けの毎日かよ。今からでも頭が痛くなつてきたぜ…」

「ええっ！…まだ始まつてもいないので…」

真人の早過ぎるギップアップ宣言に理樹は思わず叫んでツッコミを入れる。

「真人の知能は小学生以下だからな。おそらく三週間の合宿生活に頭が耐えられないんだろう」

と神妙の表情で謙吾は言つ。

「理樹、これは褒められてると思つても良いのか？」

「いや、思いつきり馬鹿にされてるから。それも凄い勢いで」

「なんだとッ…」

「うつせこわッ…」のバカども…」

怒りに任せた鈴のハイキックが理樹、真人、謙吾の後頭部に炸裂して悶え苦む三人にお構いなしに怒鳴りつけた。

「ただでさえ、このあつさにイライラしてるちゅーのお前らの馬

鹿騒ぎで余計にあつくなるわ！－

「イタタタ・・・鈴。つるさいなり蹴るよりも口で言つてくれないかな？」

「いやだ」

きつぱりと言われた事に理樹が凹んでいると鈴のハイキックのダメージから回復した真人は突然こんな事を言い出した。

「と」「ひろで俺達が合宿する場所は何処になつたんだ？」

「……お前、先生の話をちゃんと聞いてなかつたのか？」

「いやな、合宿の話をする時はいつも睡眠学習をしていたからな。不思議な事に先公の話は覚えてねえんだよ」

「それは単純にお前が居眠りをしていただけだろ！－」

相変わらずの真人の馬鹿ぶりに鈴は呆れた素振りを見せる。

そんな時に本来この場にいるはずがない人物の声が聞こえた。

「俺達が行く場所は雛見沢つて村らしいぞ」

「雛見沢か……あんまり聞いた事がない村だよね」

「まあ、理樹が知らないのは無理はない。雛見沢は興富の奥にあるかなり田舎の村だからな。そんなに有名でもないから何かの用事で雛見沢を訪れない限りは知らない奴が多いだろうな」

「へえ……結構詳しいんだね恭介」

「当たり前だろ。昨日の夜に調べたんだからな」

腕を組み、偉そうな態度を取りながら恭介と呼ばれた少年はそう言つた。

・・・・・

・・・・・

・・・・・

「 「 「 「 んつ? 」 」 」

ほほ全員が一斉に後ろに振り返る。

「な、何で馬鹿兄貴がこんな所にいるんだ! ? 」

鈴が驚くのは無理はない。何故なら恭介と呼ばれた少年は三年で一年の合宿に来れるはずは無いからだ。

「んつ? 鈴。俺がこんな所にいるのはおかしいのか? 」

「お、おかしいに決まっているだろツー! 合宿は一年だけのはずなのに三年のきよーすけがいるのは変だろ! ! 」

「ハハハ……鈴が一体何を言っているのがよく分からぬぜ」

(「……」「シラを切るつもりだ……）

「……で、恭介は何でこの電車に乗ってるの？」

「そんなの決まっているだろ。こんな面白そうなイベントを俺が見逃すと思うのか。ついて来るに決まっているだろ」

恭介の無茶ぶりは今に始まつた事ではないが、Jの一年の合宿について来た理由がそれなら無茶苦茶すぎる。

「……先生について来る事を許可は取つたのか？」

「何を言つているんだ謙吾。そんな事を言つわけがないだろ。お前達を驚かす為に無断でついて来たにんだよ」

しかも教師から許可を全く取らずに来た事に改めて鈴達は言葉を失つていた。

『次は終点、興富一興富一』

「お、どうやら目的地に着いたみたいだな。みんな荷物を取り忘れるなよ……」

「」「」「……」「……」「……」「……」「……」「……」「……」

恭介は鈴達に冷ややかな目で見つめられている事に気が付いてはいなかつた。

## プロローグ 夏期講習合宿（後書き）

今回は短めになりました。

感想を待っています。

## 雛見沢

あれから鈴達は興宮駅に着き、電車から降りると校長先生の友人が待機させていたバスにクラスごと分けて乗り、雛見沢に向かっていった。

「畜生・・・なんで俺があんなに叱られなきやいけないんだ」

「それは当たり前だよ。先生達に無断で僕達について来たんだから怒られるのは仕方ないとと思う」

「・・・理樹がこんなに冷たい奴とは思わなかつたぜ」

「こいつ馬鹿だッ！」

興宮駅に到着した時に本来ここに居るはずかない三年の恭介がいる事がバレて鈴達は滅茶苦茶叱られた（鈴達は完全に巻き添えだが）。その後、恭介は先生達からどうやつたかは分からぬが雛見沢について来る許可を貰つたみたいだ。

ちなみに恭介つていうのは鈴の兄貴で小さい頃から鈴や真人達に迷惑を掛けてきた奴だ。

「でもよ。よく先公の連中が三年の恭介が一年の俺達の合宿について来る事を許してくれたよな」

「まあな。お前達が俺を置いてこんな楽しそうなイベントをやるのは納得が出来なかつたから、土下座で頼み込んで一年のお前達の世話と勉強をサポートするといつ条件で教師の連中から許可を貰つ

「たんだ」

「土下座で頼み込んだって、恭介。お前に『プライドは無いのか?』

「プライドって何だ? 食えるのか?」

「…………」

恭介のプライドの無さに真人は言葉を失っていた。

「まあと。ここにプライドがあるわけがないだろ」

「……妹にそこまで断言されるとお兄ちゃんちょっと傷つくな」

そつは言つても凹んだ様子を全く見せない。

「本当の事だろ」

「どうやら鈴には思いやりといつ言葉を知つたもひつ必要があるな

「余計なお世話だッ! ……ほけえッ! ……」

そつ言い恭介に向かつてハイキックをする瞬間にバスが大きくガタンと揺れてバランスを崩した鈴は顔面から床にダイブした。

「フニヤツ! ……い、いきなりなんだ? 一体何が起きたんだ?」

「どうやら離見沢に入ったみたいだな。さっきの振動はコンクリートが塗装された道路から塗装されていない土の道路に入った時の振動だろ?」

さつきの振動でバスの床に顔面からダイブした実の妹にお構いなしに恭介は話を続ける。

「『リバ』ア… りょつとはあたしの事を心配しろよ… お前の妹だぞ」「んっ？ ああ、悪い忘れてた。ほら立てるか？ 早く立たないと鈴の可愛らしいパンツが目に見られるぞ」

- え - ?

恭介に言われて鈴は今の自分の姿を見てみる。

バランスを崩して鈴はバスの床に四つん這いで倒れこんでいる。そのせいでスカートが完膚なきまで捲れていて、ネコの絵がプリントされたパンツが丸見えになつていて、

おまけに何処からか携帯のカメラで今のおたしの姿を取る音が聞こえた。

「フ、フニヤアアア――ツツツ――」

「うう……思いっきり見られた……あたしはいまつちやんと回り比べ  
ルのアホな子だ」  
「まあまあ……元気だしてよ。鈴。あれは事故だから気にしたら駄  
田だよ……それと何気に神北さんを馬鹿にしていい?」  
「何を言つてるんだ理樹。なんで『いまつちやんの事を馬鹿にしなき  
やいけないんだ?ともだちだそ  
やいけないんだ?ともだちだそ  
つて、んつ?』」

何気に移り変わる外の景色に目線を向けるとこの村の掲示板に『雛見沢ダム建設反対！！』というポスターが貼つてあるのが目に止まつた。

「なあ、きょーすけ。雛見沢ダムってなんだ？」

「雛見沢ダム？うーん……詳しい事は分からないが四年前にこの雛見沢にダムを作る計画があつたらしい。でも雛見沢住人の大規模な反対運動があつてダム計画は廃止になつたらしい」

「ふーん……」

話が終わると恭介は持参していた漫画を読み始めた（よくバスが走つている中で漫画を読めるな）。鈴もそれを詳しく知りたいと思わなかつたらしく真人達と雛見沢に着いたらどうするか話を始めた。

それから数十分後、真人達と無駄な会話を続けているとこの田舎の村には不必要なくらいなデカいホテルが見えてくる。

バスから降りてそのホテルを見た鈴と真人の第一声は

「うお！…すげえーデかいホテルだな」

「てか、こんな田舎の村にホテルなんか作つてどうするんだ？客は

ちゃんと入るのか？」

「ははは……真人に鈴。少しばかりにしようよ。ほら先生達が呼んでるから早く行くよ」

理樹は鈴と真人の襟首を持ち、引きずりながらホテルに向かっていく。

ホテルに入ると始めて三週間お世話をしてくれる人達とこの村の村長で御三家の一人（御三家はこの離見沢でリーダーみたいな存在）、公由と御三家で一番偉い園崎頭首のお馴巴アさんの挨拶があり、この村の生活と入っちゃいけない場所と注意事項などを教えてくれた。その中で『祭具殿』と『オヤシロ様』とい単語が一番印象に残つていた。

挨拶が終わると鈴は他のクラスメイトと同じ様に荷物を置くために割り振られた部屋に向かった（ちなみにホテルの部屋割りは寮の部屋と同じ）。

部屋に着くと同時に離見沢に向かう長旅で疲れた鈴にベッドに倒れ込み。

（ひぐらしの鳴き声が聞こえる・・・・）

カナカナカナカナと外から聞こえるひぐらしの鳴き声はまるでこれから起ころる惨劇を予感させる鳴き声だといつ事に鈴はまだ気づいていなかつた。

難見沢（後書き）

修正しても黙文のままだなあ  
・・・

## 探検（前書き）

投稿予定が遅れてしまい、すいませんでした。

遅れた理由は活動報告で言いましたけど、友人が自分が書いた小説を「台本小説みたいだな」と言われてショックを受けた事を報告したらコーネザーの皆が小説が上手く書ける様になるコツを教えてくれましてこの一日間はその勉強をしていました。

そして今回から小説の書き方を変えましたから変な所やおかしい所があつたら教えて下さい。

合宿二日目

「（モグモグ）それで今日の午前中はどうするんだ？」

ホテルの食堂で朝食を食べながら鈴はこれから予定を恭介達に聞く。

合宿一日目は教師達の都合で午前中の授業がなくなり、自由時間になつた（もちろん午後から普通に授業がある）。それで空いた時間をどうやって過ごすか此処に居る全員で話し合つていた。

「（モグモグ）うーん……そつだな……よし……せっかく午前中が暇になつたんだ。リトルバスターズの皆と離見沢を探検するか！――」

その恭介の案に『賛成！！』と全員の声が揃う。

ちなみにリトルバスターズというのは鈴と理樹、謙吾、恭介が幼い頃に作つた正義の味方集団でよくミッショント称して真人達と遊んでいた。一ヶ月前に野球チームを作るに至つてリトルバスターズを再結成すると同時にメンバーを増やす事を恭介が決めた。

新しいメンバーは鈴達と同じクラスメイトの神北小毬と能美クドフヤリカ、来ヶ谷唯湖、西園魚美、そして三枝葉留佳の五人がリトルバスターズに入りました。

初めは単純に野球チームを作る為だけに恭介と理樹が選んだメンバーだったが、『あの世界』で成長した鈴達の間には固い絆で結ばれた大切な仲間になっていた。

「んで、恭介。雛見沢を探検するのは言いけどよ。何処を最初に見に行くんだ?」

真人のその問いに恭介は

「それはだな・・・」

「それは?」

「雛見沢を歩きながら決める」

ガクツと恭介の無計画さに鈴達は椅子から転げ落ちる。

それから鈴達は朝食が食べ終わると雛見沢の探索に出掛ける。

「わふー、本当に雛見沢は自然が多い所ですね。これこそ日本の田舎の村だと感じがします」

外国育ちのクドは初めて見る雛見沢の大自然に感激していた。

「本当ですよ。この自然の中にいるとハルちゃんの汚れた心が洗われていいくよつの気がしますね」

「・・・・・・・・・・」

その葉留佳の言葉に誰も答えない。

「えつ、ちょっと話せん。どうして何も言わないんですか?ひょつとして話せん、本当にハルちゃんの心が汚れてると思つてるんですかツー?」「

「そういえば田舎の学校つてどんな感じなんだ?」

「言われてみればそうだな。俺も田舎の学校がどんな感じのか気になる。よし、最初に離見沢の学校を見に行つて見るか

「うわーん!!無視しないでよー!!理樹君!!恭介さん!!」

ギヤーギヤーと騒ぐ葉留佳を無視しながら村を歩いていると、鈴達の田の前に當林所らしい建物が見えてきて、校庭らしい場所で遊んでいる子供達が居た。

「・・・なあ、まさと。まさかあれが学校なのか?」

「いやいや、有り得ないだろ。あれが学校だとしたなら小さ過ぎるだろ」

鈴達が疑問に思うのは無理はない。何故なら田の前にある学校?はどうみてもクラスが一つしかないからだ。

「あのー?」

「ー?」

突然、背後から話をかけられて振り返つてみると緑色の長い髪をポニーテイルしていてプロモーションが抜群の女性が居た。

「ひょっとして雛見沢に合宿に来ている人達ですか？」

「ツー！」

その女性に声を掛けられた鈴は真人の後ろに恥ずかしそうに隠れる。

「…………」

「あれ？ いきなりどうしたの？ おじさん何か悪いことした？」

「いや、気にする事はねえーよ。こいつは『フニヤツ！』人見知りが激しい奴なんだよ」

真人はそつとうと真人はゴツゴツした手で自分の後ろに隠れた鈴の頭を乱暴に撫でる。

「…………それなら良いけど…………」

「………………………………」

「………………………………」

女性と鈴達の間に流れる氣まずい空気を変えようと真人はこんな事を言い出した。

「そ、そういうばまだ自己紹介をしてなかつたよなー！俺の名前は井ノ原真人。んで、俺の後ろに隠れているのは棗鈴だ」

「よ、よろしく…………」

鈴は真人の後ろから顔を出してその女性に向かつて挨拶をする。

「それから童顔で背が低い奴が直枝理樹。その隣にいる剣道着を着た奴は宮沢謙吾。そしてこの中で一番年上の棗恭介。ちなみに鈴とは兄妹な。女達の方は外国人と日本人のハーフで小学生みたいな女は能美クドフヤリカで青い髪の女は西園美魚。黒い髪でロングヘアの女は来ヶ谷唯湖。紫色の髪の女は三枝葉留佳。最後は短めのサイドポニーの女は神北小毬だ」

「よひしく

「宜しく頼む」

「よろしく頼むぜ」

「わふー、宜しくお願ひします」

「・・・・宜しくお願ひします」

「つむ、宜しく頼む」

「よろしく頼むぜいーーー！」

「よひしくーーー」

鈴達側の自己紹介が終わると今度は女性達側が自己紹介を始める。

「おじさんの名前は園崎魅音。それでこの白いワンピースを着た女の子は竜宮レナ。金髪のショートヘアを付けた子は北条沙都子。青い髪のロングヘアの子は古手梨花。最後はこの中で唯一の男の子の前原圭一だよ」

「はうー宜しくねえーーー」

「宜しくお願ひしますことよーーー」

「宜しくお願ひなのです」

「よろしくなーー！」

お互い自己紹介が終わると恭介達はそれぞれ話を始めた（その間も鈴は魅音達とは話さずすつと真人の後ろに隠れていた）。

「それじゃあ、我が部活メンバーとリトルバスターズの皆でゲームをするよーーもちろん負けた方には罰ゲームがあるから気を引き締めていきなよーー！」

「うおッーー一体どんなゲームをするが楽しみだせーー！」

いつの間にか魅音と恭介は意気投合し、此処にいる部活メンバーとリトルバスターズのメンバーで遊ぶ事になった。

「でもよ。魅音。遊ぶって言つても恭介さん達はこの雛見沢の事をよく知らないんだから俺達が有利になるゲームはやるなよ」

「フフフ。そこは抜かりは無いから大丈夫だよ。おじさん達がするゲームは・・・」

魅音はその場でクルクルと一回転してボースを取る。

「鬼ごっこをやるよオーッツーー！」

ドッカーンと魅音の背後が爆発？した様に見えた。

「おいコラ、何処がちゃんと考えているんだよ。どう考へても俺達  
が有利なゲームだろうがアアアアアア！！」

「まあまあ、落ち着いてよ圭ちゃん。おじさんの話を最後まで聞い  
て、もちろん逃げられる範囲は学校の敷地以内だからね」

魅音の提案を聞いた恭介は不適な笑みを浮かべて

「まあ、それだと条件は五分五分だな。よしーーその勝負乗つた！  
！」

と言つた。

「これで決まりだね。鬼は四人組で逃げる人は一人組で逃げる」と、  
皆、気合を入れてジャンケンするんだよーーー！」

『おおーーーツ！！』

それから激しいジャンケンの嵐の末で鬼が決まった。

鬼

魅音、恭介、レナ、美魚。

逃げる組

クド、小毬ペア。

来ヶ谷、葉留佳ペア。

鈴、真人ペア。

梨花、沙都子ペア。

圭一、謙吾ペア。

「おじさん達、鬼は五分後に追いかけるからね」

「それじゃあ」

「ゲーム（ミッション）スタート……」

ゲーム開始の合図と共に此処にいる全員が一斉に散らばって逃げ出した。

**探検（後書き）**

感想を待っています

## 迷子

「…………なあ、まさと。『』何処なんだ?  
「…………俺だって知りてえよ…………」

鈴と真人は離見沢にある森の中を歩いていた。  
一体どうしてこんな事になつたのか話は30分前に遡る。

回想

30分前

『クソッ！…きょーすけの奴、あたし達の事を追いかけて来るぞ！』  
『そんな事は分かつてらあッ！…鈴、こっちだッ！…』

真人はそう言つと鈴の手を引きながら離見沢分校（この学校の名前らしい）の裏に逃げ込むが

『ククク・…・・残念でした』  
『魅音！？』

逃げ込んだ校舎の裏には魅音が待ち構えていた。

『実はこれ君達を捕まえる為に恭介さんが考えた作戦なんだよね』

と魅音が言つてゐる間に恭介も鈴達に追いついてくる。

『さあ、觀念しろ。鈴、後はお前達だけを捕まえれば俺達の勝ちだからな』

恭介の言つ通り、鈴と真人以外のメンバーは生き残つていない。  
何故なら鈴達以外のメンバーは落とし穴とかの罠に全員が引っ掛け  
つて捕まってしまったからだ。

ちなみに罠を仕掛けた魅音いわく『罠を仕掛けてはいけない』という  
ルールは決めてないから反則じやない』らしい。

『び、びびびびびつするんだッ！…まさひと…このままだとあたし  
達、捕まるぞ…』

『つかせえよ…今、びつすれば良いか考えてる所だッ…』

激しく動搖し、冷静を無くした真人は鈴にそう言い返す。

今の真人は使えないと思ったのか鈴は恭介達から逃げる事が出来る  
ルートを周りを見渡しながら探す。

すると左側に小さな植木がある事に気づいた。

『ツー…まさと…』ハチだツ…。』

鈴は真人にそう言い左側にある小さな植木を飛び越えて森の中に逃げ込む。

おおにツ！待てよ鈴！』

それに続く様に真人も植木を飛び越えて森の中に逃げ込む。

『し、しまつたッ！－追いかけるぞ！－魅音！－』

卷之三

•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•

回想終了

「しかし夢中で逃げるのは構わねえけどよ。帰り道が分からねえつて事はどうなんだ？」

—

卷之三

「ビ、どわしへーーーいきなり向をしやがねーーー、あーーー鈴

「あらねた！」

卷之三

— ! !

顔を真っ赤にして繰り出される高速の連續ハイキックを真人は紙一重で交わしていく。

「フカ――――！ 誰が許すがぼけえ――――ツ――！」

數十分後

「す、すいません。ちょっと調子に乗つてました」

顔に靴の跡を作りながら真人は謝る。

「…………」

「本当に反省します。お詫びにカップゼリーとモンペチを奢りますから許して」

「許す」

「つて、それで良いのかよ！…単純だなお前！…」

そんな真人のツツ「ミ」を無視して歩くこと数十分後。この森の出口らしい所が見えてくる。

「おいッ！…鈴！…出口が見えてきたぞ！…」

「ハラア…！…あたしを置いてくなあーーー！」

一人で出口に向かって走っていく真人に怒鳴りつけながら追いかけ  
る。

「やつたぜ！…出口に到着だ つて、此処は何処だ？」

「ハアハアハア…・・・何かの・・ハア・・神社みたいだな」

森を抜けてみると学校じゃなく神社に出てきてしまったらしい。  
しかもその神社の鳥居を見てみると『古手神社』と書いてある。

「古手・・・・・神社・・・?」

何処がで聞いた事ある名前だなと鈴は思つていると

「おー、鈴」

真人が話しかけてきた。

「?まさと。あたしに何か用か?」

「まあな、それよりも鈴。何か喉が渴かねえか?」

「言わっていたらそうだな。鬼から逃げるのに夢中で逃げ回つたせいで喉がカラカラだ」

ジンワリと額に浮かぶ汗を手の甲で拭い、この暑さから少しでも涼しくなると鈴は胸元をパタパタさせる。

「だったら何か飲まねえか?あそこに水飲み場があるから良いだろ。このままじゃ干からびるぜ」

真人はそつと神社でよく見かけるひしゃくを指差す。

「そりだな。あたしもその意見には賛成だ」

「なら早く行こうぜ。もう喉が渴きすぎて限界だ」

「あ、コラッ……またあたしを置いてくな……」

そんな鈴の叫びは真人には届かず、一人でさつきにひしゃくの所に行ってしまった。

「つたぐ、本当にまわとはしおがない奴だ。何度言えば分かるんだ」

鈴は口でそんな事を言つたが、不思議な事に怒りが沸いてこなかつた。  
むしろ

(あたしはまさとの明るい所が・・・好きだからな)

『どうした鈴? 早く来いよ。水が冷たくて上手いぞ』

「ツー! 分かってる。今からそっちに行く! 』

顔が赤くなつた事を誤魔化しながら真人の所に向かおうとするが神社の隣にある蔵に偶然目に止まった。

「?」

何処にもでもある様な小さな蔵に鈴は引き付けられた様に向かっていく。

「IJの中には一体何が入っているんだ？」

離見沢に来てから鈴は変だつた。

いつもの鈴は激しい人見知りであるがゆえ、ネットワトルバスターZの仲間達にしか心を開かず、他の事には滅多に興味を持たなかつた。

「なんだ。鍵が掛かっているのか」

その蔵に入ろうとしたが扉には南京錠が付いていて入れそうにもなかつた。

試しに何度もその鍵を開けようとしたが女の子である鈴の力では全くクリともしない。

「うみゅー・・・・・やつぱり駄目か・・・IJの中がどうなつているかは気になるが、諦めるか」

よく考えれば別にそこまでして見たいと思える場所じゃなかつた。それに何故この蔵の中が気になつたのが鈴自身でもよく分からなか

つた。

(本当に最近のあたしはじうしたんだ? ジリヒトの蔵の中が氣になつたんだ?)

「口ア、駄目よ。『祭具殿』に入るのは止めた方が良いわよ。そこは離見沢で一番神聖な場所だからよそ者が入つたら叱られちゃうわよ」

声を掛けられた鈴は後ろを振り向くと金髪のストレートヘアード年は二十代後半の女性が立っていた。

迷子（後書き）

何か物凄い駄文だな

・  
・  
・

感想を待っています

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6568u/>

ひぐらしのなく頃に改

2011年10月8日03時08分発行